

六角橋杉山大神では今年も「大祓式」を執り行います。

この神事は「夏越の大祓い」とも言われており、日々の生活の中で知らず知らずのうちに身につけてしまった罪や穢れを祓い清める為に、茅の輪をくぐり、人形（ひとがた）に罪穢れを移し、神話に基づき疫病除け、災難除けを祈ります。

701年の大宝律令によって正式な宮中の年中行事に定められました。

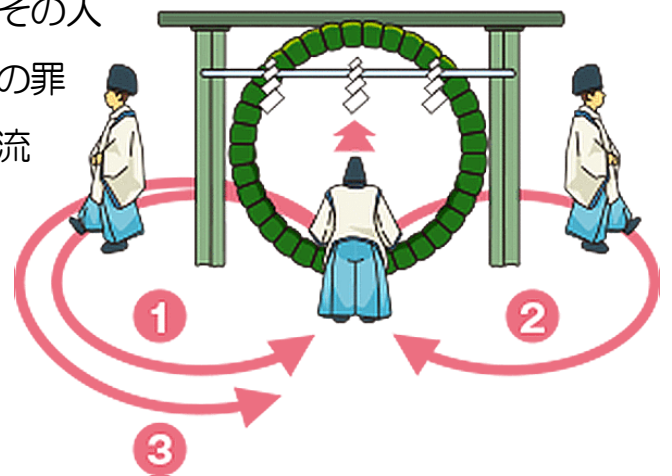
衣服を毎日洗濯する習慣や水などのない時代、半年に一度、雑菌の繁殖し易い夏を前に新しい物に替える事で疫病を予防する意味があったとされています。

日 時 : 令和5年6月30日
午前09:00 ~ 午後16:00まで
場 所 : 六角橋杉山大神境内

茅の輪くぐり

茅の輪をくぐることにより、笹や茅の青々とした自然の生命力を分けていただき、災いを祓い、半年間を元気で過ごせるようにとの願いを込めてくぐります。

大祓では、「人形(ひとがた)・形代(かたしろ)」を用いて祓をします。人の形に切り抜いた紙に、自分の名前と年齢を書き、その人形で身体を撫でて息を吹きかけます。自分の罪や穢れを人形に移し、その人形を海や川に流したり焚き上げたりすることで、自分の代わりに清めてもらうというものです。



茅の輪神話

昔、北の海に住んでいた武塔の神（スサノオノミコト）が、南海の神の娘に求婚をするために出かけ、途中で日が暮れてしまいました。

そこでその地で暮らす将来という二人の兄弟に「泊めてほしい」とお願いをした



ところ、豊かな弟・巨旦
将来は宿を貸さず、一
方、貧しい兄・蘇民将来
は宿を貸し、粟柄で席を
作り、粟飯などの御馳走
でもてなしました。

その後、何年か過ぎ、
武塔の神は八人の子供を
連れて再訪。そして蘇民

に「昔の親切に応えたい。お前の子供や家族は？」とお尋ねになりました。蘇民が「私には娘と妻がおります」と答えると、「では茅の輪を作って腰の上に着けなさい」とおっしゃいました。蘇民は言われた通り、茅の輪を作って腰に着けさせました。

そしてその夜、蘇民の娘ひとりを残し悉く死んでしまったのです。

そして武塔の神は「私はスサノオノミコトである。後の世に疫病があった時には、蘇民将来の子孫だと云い、茅の輪を腰に着けた者だけは疫病から逃げる事ができよう」とおっしゃいました。

腰につけていた茅の輪が、時が過ぎるにつれて大きくなり、今は鳥居に設置されるようになりましたが、それは同時に、私たち日本人の「疫病が消えてほしい祈り」の強さに他なりません。そしてその祈りに応え、古代からスサノオノミコトは見守ってくださっているのです。